



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	貧困当事者が語る「貧困とはなにか」：参加型貧困調査を通じて〔全文の要約〕
Author(s)	陳, 勝
Description	この博士論文全文の閲覧方法については、以下のサイトをご参照ください。 https://www.lib.hokudai.ac.jp/dissertations/copy-guides/
Degree Grantor	北海道大学
Degree Name	博士(教育学)
Dissertation Number	甲第15566号
Issue Date	2023-06-30
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/90225
Type	doctoral thesis
File Information	CHEN_Sheng_summary.pdf



博士学位論文（要約）

【題目】

貧困当事者が語る「貧困とはなにか」
ー参加型貧困調査を通じてー

陳 勝

【目次】

序章 貧困理解におけるもう一つの視点	1
1. 本研究の目的とその背景	1
2. 分析の視点	4
3. 本論文の構成	6
第1章 貧困当事者を包摂する参加型貧困調査	8
1. 参加型貧困調査の実例	8
2. 「参加」の課題とその担保	11
2.1 参加者の募集	11
2.2 調査の進行	11
2.3 結果のアウトプット	13
3. 参加型貧困調査の有用性	14
第2章 本研究で実施した参加型貧困調査の説明	17
1. 調査概要	17
2. 実施課題1ー参加者の募集	20
2.1 調査情報の伝達	20
2.2 調査環境の整備	22
2.2.1 場所	22
2.2.2 時間	22
2.2.3 謝礼	23
2.2.4 サポート	24
3. 実施課題2ー調査の進行	25
3.1 議題の設定	25
3.1.1 議論のプラットフォーム	25
3.1.2 話題の提起	27
3.2 議論の展開	29
3.2.1 権力不平等の回避	29
3.2.2 インタラクティブな議論の進行と展開	29
3.2.3 参加者自身による言葉の説明	31

4. 実施課題 3ー結果のアウトプット	33
4.1 調査結果の確認	33
4.2 文章化の方向性	33
4.2.1 参加者の要求や希望に従うこと	34
4.2.2 必要最小限のテクニカルな処理	36
5. 小結	41
第3章 貧困当事者が見た「貧困」	43
1. 「貧困」の言葉に対するイメージや理解	43
1.1 貧困	43
1.2 アンダークラス	45
1.3 社会的排除	47
2. 貧困の意味	49
2.1 金銭的・経済的	49
2.2 制約的	49
2.3 心理的・感情的・精神的	50
2.4 关系的・階級的	51
2.5 労働的・時間的	52
2.6 教育的	53
2.7 健康的	53
3. 誰が貧困者である・でない・何で区別	55
3.1 共通に考えられた点	55
3.1.1 金銭的な原因でやりたいことができるかどうかで区別	55
3.1.2 選択の余地があるかどうかで区別	56
3.1.3 「心」の余裕があるかどうかで区別	56
3.2 論争となった点	57
3.2.1 自分の「心」はどう思うかに関する議論	58
3.2.2 本人が努力するかどうかに関する議論	60
4. 小結	64
第4章 貧困当事者が経験した「貧困」	65
1. 心配・困りごと	65
1.1 「金銭的・経済的」に関すること	65
1.2 「制約的」に関すること	67
1.3 「心理的・感情的・精神的」に関すること	68
1.4 「关系的・階級的」に関すること	71
1.5 「労働的・時間的」に関すること	74
1.6 「教育的」に関すること	77
1.7 「健康的」に関すること	79
2. 貧困当事者のエイジェンシー	81

2.1 検討の視点と注意点	81
2.2 やりくり	85
2.3 反抗	87
2.4 脱出	88
2.5 組織化	90
3. 貧困の構造上の諸側面からの制約	92
3.1 物質的・経済的	92
3.2 社会的・文化的	93
3.3 政治的・代表的	95
4. 小結	97
第5章 貧困当事者が振り返る調査参加	99
1. 貧困当事者にとっての調査参加の意味	99
1.1 貧困について議論できたこと	99
1.2 貧困認識が深まっていくこと	103
2. 貧困当事者からの調査に対する改善提案	108
2.1 「だれ」が貧困議論の主体となるべきか	108
2.2 「如何に」貧困を議論していくべきか	111
3. 小結	118
終章 本研究で理解し得た「貧困」	121
1. 貧困当事者が語った「貧困」	121
2. 本調査研究から学んだこと	130
3. 今後の課題	134
補論 新たな貧困政治の検討	136
1. 従来の貧困議論	136
2. 貧困当事者による貧困構築	138
3. 「参加」の政治に向けて	141
付録1：関連分野での参加の実践	143
付録2：「代議制民主」との関係性	145
付録3：「代表性」が必ず必要なのか	146
付録4：調査参加者募集ポスター	147
付録5：プレ調査の説明	148
文 献	149
初出一覧	155
研究助成	155
謝 辞	155

【要約】

貧困当事者が語る「貧困とはなにか」 —参加型貧困調査を通じて—

陳 勝

本研究の目的は、貧困当事者を包摂する参加型貧困調査を通じて、貧困当事者の主体側から貧困を理解することである。

貧困研究の蓄積がより多くあるイギリスでは、1990年代に入ってから従来の貧困研究に対して次のような批判がなされている。これまでの貧困研究は貧困の構造的側面に焦点化し、貧困は構造のせいであると指摘するが、実在の人間への配慮が少なく、貧困当事者がそこでの議論や調査から排除され他者化にされている。結果的に、貧困当事者が貧困をどのように理解しているかが明らかにされていないままに「貧困」が構築されている。これに対して、一部の研究者はこれからの貧困研究を行う際により包摂的な方法で、貧困経験者の視点を取り入れること、そしてそれを参加型の手法を通じて行うこと（本研究では、貧困当事者を包摂する参加型貧困調査とする）を提起し実践してきた。こうした参加型貧困調査は、直接的な貧困経験を持つ人々が調査過程において、より発言権を持つように、よりコントロールできるようにすることが特徴であり、貧困当事者の調査への「参加」を保障することによって、貧困当事者の視点から貧困を理解するのに有効だと評価されている。

上記に対して、日本では近年来貧困者自身の生活意識や貧困経験を重視し理解しようとする研究はいくつかあるが、貧困者が調査の主体となり、自分たちの関心を調査アジェンダに組み込んで自らの貧困分析を行っていくという点では十分とは言えない。具体的には、これらの貧困研究は、特に子どもという社会的区分に焦点を当て、基本的には「貧困の世代的再生産」の議論の延長であり、大人や家族または施設の対として脱家族の論点から子どもを主体として把握するという構えで行われたと考えられる。これは、そもそも、貧困当事者が自分たちに関する貧困の議論や調査研究に参加し、従来の研究者、政治家、メディアなどと並び、貧困を構築するもう一つの主体とするような本論文の研究意識とは異なっている。また、これらの研究ではインタビュー調査を通じて、また時間をかけた観察や参与観察が行われる場合も含めて、確かにさまざまな貧困当事者の言葉が示されているが、多くの場合は研究者らの論点や分析に当てられて、貧困当事者の貧困分析それ自体とは言えない。なぜなら、どれほど丁寧なインタビュー調査であっても、それは調査者（多くの場合は研究者）があらかじめ用意しておいた調査項目に沿って、貧困当事者に質問し、回答を求める形で行うものであり、貧困当事者にとっては外部から持ち込まれるものだからである。

以上のように、これまでの日本の貧困の実証研究においては、貧困当事者を貧困に関する議論や調査研究の主体と見なして「参加」の意識をもとに行われた調査研究がまだまだ少ない状況に対して、本研究は参加型貧困調査を実施し、貧困当事者自身が貧困について語ることを促進し、彼らの貧困に対する見解や分析を実証的に捉えてみた。そのため、本論文は以下の構成で展開してきた。

第1章は、本研究の先行研究、すなわち、貧困当事者が自身による貧困とはなにかを探索

するのに有効とみられている参加型貧困調査を紹介した。具体的に、イギリスにおける先行した代表的な調査研究を分析し、方法論の視点から参加型貧困調査の実施にあたって「参加者の募集」「調査の進行」「結果のアウトプット」の各段階での課題を明らかにした。そこで、先行研究の検討から貧困研究にとっての参加型調査の有用性を改めて確認した。

第2章は、本研究の研究方法の紹介であり、主に本研究で実施した参加型貧困調査の詳細を説明した。具体的に、本研究で実施した調査の概要を紹介したうえで、第1章で分析した参加型貧困調査実施上の各段階での課題に対して、日本において実施した本調査を進めていくなかで実際に生じた課題とそれをクリアするために行った対応、特に調査の全過程において参加者たちの調査への「参加」を保障するためにどのような調査の手続きを取ったのかを解説・検討した。その内容は以下の3点にまとめできる。

第1に、参加者の募集では、課題であった調査の情報伝達と環境整備に対して、中間協力者や反貧困組織の協力を受けながら、参加しやすいような調査の場所や時間の設定、金銭を含む各種サポートを行った。こうしたことによって、本調査では生活保護受給者や非正規労働者などの多様な貧困経験がある若者32名の参加者を募集でき、男性/女性、学生/社会人、日本人/外国人という参加者の属性によって8グループに分けた。

第2に、調査の進行では、話題の設定と議論の展開が課題であった。話題の設定に関して、本調査は調査の目的、主旨、大枠かつオープンな主題を提示できるような議論のプラットフォームを作成することで、参加者たちの関心を議論できるようにした。議論の展開に関して、本調査はグループごとに3回の集まりを持ち、1回目は「貧困に対するイメージや理解」、2回目は「生活上の心配や困りごと」、3回目は「調査の結果確認とコメント」について、グループディスカッションの形式で進めた。これによって、参加者と調査実施者、そして参加者同士の権力関係の不平等が生じることを回避し、インタラクティブな議論の進行と展開を実現し、議論のなかで参加者たちの用いた言葉を彼ら自身で説明するように促進し、参加者たちが「貧困」について自分なりの貧困分析を行うことができた。

第3に、調査結果に関して、主に参加者の確認とコメントを経てからアウトプットを行った。その際、内容の確認だけでなく、文章をどのように表現するか、調査参加の感覚やコメントなどについての参加者たちの意見も提示してもらった。

第3章、第4章、第5章は、上述の方法によって得られた調査結果を説明した。それぞれの内容は以下である。

第3章は、貧困当事者が見た「貧困」を説明した。本章は、主にこれまでの貧困議論でよく登場した貧困の言葉・言説である「貧困」「アンダークラス」「社会的排除」に対する、参加者たちの持つイメージや理解を議論し、参加者たち自身が考えた貧困の意味、そして誰が貧困者である・でない・何で区別するかについて話し合った内容のまとめであった。これにより、貧困当事者が考えた貧困の意味や基準が示された。

第4章は、貧困当事者が経験した「貧困」を説明した。本章では、主に前章で説明した参加者たちが考えた貧困の意味をよく理解するために、参加者たちが自分たちの具体的な「心配・困りごと」についての議論、そして、参加者たちがこれらの貧困問題に対応するのに発揮したエイジェンシーを取り上げた。それで、貧困当事者が貧困に直面するなかでの苦闘や脱貧困に向けて行った戦略などを検討し、そこから見られた貧困当事者がエイジェンシーを発揮する際に直面した貧困の構造上の制約を考察した。それで、貧困の意味だけではなく、

貧困当事者に対する理解も深めた。

第5章は、貧困当事者が振り返る調査参加を説明した。本章では、主に今回の調査参加は貧困当事者にとって何を意味するか、またこのような貧困の議論や調査に何か建設的な意見や考えがもたらされたのかを確認した。それにより、貧困当事者の調査への「参加」を調査に対する振り返りまでに担保し、貧困当事者の視点から本調査の妥当性を検証し、今後の調査実施に向けてその改善点を洗い出した。この第5章の内容は、第3章と第4章の内容と並び、本研究で設定した「貧困当事者の主体側から貧困を理解する」という研究目的に対して、実際に参加型貧困調査を通じて理解し得た「貧困」を示しただけではなく、貧困当事者は貧困を議論し分析できることとそこから新たな知識を生み出せることの実証的なエビデンスの提供にもできた。

終章では、本研究で理解し得た「貧困」をまとめた。具体的に、先行研究と照らし合わせながら本研究においての貧困当事者が語った「貧困」、特に貧困理解にとって重要ないくつかの貧困の主題を述べた。その後は、本調査の実施を通して新たに学んだことを紹介し、今後の課題を提起した。

ここまでは、主に本論文の研究目的である貧困理解に従って、どのような調査の手続きを通して、どういった貧困理解を得たのか、このように理解し得た貧困に対して参加者たちはどのように考えて評価したのかを中心に述べてきた。ただ、実際に調査を実施し貧困や貧困当事者に対してよりよく理解できただけではなく、「参加」が果たした役割が顕著であり、貧困を研究し理解していくなかでの重要性も深く感じられた。そのため、こうした本論で真正面に論じられなかった「参加」について、改めて補論を設けて検討した。補論では、従来の貧困議論を概観したうえで本調査の実施によって促進した貧困当事者による貧困構築の意義を示し、貧困研究を発展させていくには「参加」という新たな貧困の政治の検討がとりわけ重要であることを提起した。